



ポスター発表

2月10日(金) 11:15~12:15 体育館

<提案のポイント>

①

【総合教育センター研修】

児童のよりよく情報社会に参画しようとする態度の育成

～「場面の設定」「家庭との連携」を取り入れた授業を中心とした指導モデルを通して～

横手市立雄物川小学校 教諭 柴田 直俊

社会の情報化進展の一方で、ICT端末に関わる諸問題も低年齢化してきている。安全と倫理上の意識の希薄、情報モラルの学びが行動に結び付かないこと、児童の使用状況についての大人の認識不足が原因と考えられる。そこで児童にとって学ぶ必要性のある場面を設定し家庭との連携を取り入れた授業を中心に指導モデルを考え実施した。主体的な学びにより意識面や行動面で変容が見られ、児童のよりよく情報社会に参画しようとする態度が向上した。

②

【総合教育センター研修】

他者の個性や立場を尊重し、進んで関わろうとする生徒を育成する道徳の時間

～立場に焦点を当てた体験的な学習を通して～

横手市立横手明峰中学校 教諭 吉沢 香織

卒業後の良好な人間関係構築のために、中学校第3学年において「相互理解、寛容」の理解と実践意欲と態度の育成は重要である。そこで「相互理解、寛容」を扱う時間において、自分が置かれている立場に焦点を当てた3段階のステージを設定し、立場に応じた体験的な学習を授業に取り入れた。それにより、価値について実感を持った理解を促し、学びを実生活に生かそうとする意欲と態度の向上が見られた。

③

【総合教育センター研修】

技術を適切に評価し活用する能力を育成するための題材構成の工夫

～技術分野「エネルギー変換に関する技術」の指導を通して～

三種町立八竜中学校 教諭 柴田 淳

中学校技術・家庭科技術分野において、技術を適切に評価し活用する能力の育成が求められている。本研究では、技術の評価や活用について考える場面を、段階的に複数回設定するなど、題材構成の工夫を通して、その能力の育成を目指した。その結果、様々な側面や観点から技術を評価し、根拠を示しながら適切な解決策を見いだせる生徒が見られるようになった。実践を基にした題材構成の具体について紹介する。

④

【総合教育センター研修】

生徒の自己有用感を高めるキャリア教育の取組

～生徒や地域の「持ち味」を生かした学習活動をを通して～

潟上市立羽城中学校 教諭 杉本 一仁

本研究では、生徒や地域の「持ち味」を生かした学習活動の過程を、「持ち味」に気付く、「持ち味」を使う、「持ち味」を認め合うの3段階とし、それぞれの段階で貢献・承認・存在感を意識した指導を行うことが自己有用感の高まりに有効であろうと考えた。ふるさとCMの制作を題材とした3回の検証授業を行った結果、「持ち味」を生かした学習活動の工夫が、自己有用感の高まりやキャリア発達に有効であることが確かめられた。

⑤

【総合教育センター研修】

小学校社会科地域学習における児童の「問い」を引き出す導入資料の開発

～個の疑問を生かした学習問題の設定を通して～

横手市立横手南小学校 教諭 佐藤 光彦

研究協力校の児童は、資料を活用して地域の社会的事象の特色や相互の関連について考えたり、理解を深めたりすることに課題があった。そこで、児童が社会的事象を自分のものとして追究するための「問い」を引き出す導入資料を開発し、それを活用して授業を展開した。その結果、資料の事実と児童の認識のずれから生じた個の疑問を生かして学習問題を設定することにより、追究意欲の高まりや社会的事象への理解の深まりを確認できた。



ポスター発表

2月10日(金) 11:15~12:15 体育館

<提案のポイント>

⑥

【総合教育センター研修】

中学校理科における「科学的に結論を導くことができた」を実感できる指導の工夫
～「My探究」と「Our検討」を組み合わせた学習を通して～

秋田市立秋田東中学校 教諭 永田 謙

秋田県では問題解決のプロセスを重視し、予想や仮説を観察・実験や考察に生かした学習活動の展開を課題として挙げている。そこで、自分なりに観察・実験方法を考え、結果から結論を導くことができるように、生徒が自力で探究を進める「My探究」と複数で考えを検討し合う「Our検討」を組み合わせた学習に取り組んだ。その結果、目的意識をもって探究活動に取り組み、科学的に結論を導く生徒が増えた。

⑦

【総合教育センター研修】

特別支援学校高等部生徒の客観的・肯定的な自己理解を促す指導の工夫
～作業学習における自己理解シートと作業日誌の活用を通して～

県立支援学校天王みどり学園 教諭 齊藤 舞子

自己理解の発達段階を考慮し、自分の発言や行動の意味について考えることができるような「自己理解シート」を作成した。作業学習において作業日誌と連動させて自己理解の視点から振り返る場面で活用したことで、実感を伴って考えることができ、自分には得意・不得意があることに気が付き、他者のよいところを認める様子が多く見られた。また、このことは、作業学習の目的意識の向上にもつながった。

⑧

児童生徒の社会参加を育む生活指導の在り方
～掃除活動を通して～

県立比内支援学校 寄宿舎指導員 豊嶋 新二

2年間の研究を通して、掃除の技術指導だけでなく、なぜやるのかという意識面の指導の大切さに気付いた。また、協力掃除の取組によって思いやりと助け合いの気持ちを育むことができた。家庭的掃除の取組では卒業後の生活を見据え、家庭用の用具で掃除を行う機会を設けた。さらに、社会人としてのマナーを身に付けることも社会参加の力の一つとして考え、「汚さないマナー」として指導を行った。これらの取組について紹介する。

⑨

【あきた白神体験センター研修】

体験活動における指導者・保護者・地域講師の連携についての研究
～体験のねらい・効果の共通理解を目指した取組を中心として～

能代市立竹生小学校 教諭 山崎 泰明

体験活動のねらい・効果について、指導者・保護者・地域講師が共通理解を図ることにより、児童が行う体験活動の効果が更に高まることが期待できる。本研究では、小学校高学年児童の精神的発達に関わる特徴を考慮しながら、3者の共通理解を目指した連携に関する取組を行った。その結果、3者の連携強化・深化につながり、体験活動も充実したものとなった。体験活動における連携強化・深化の一例を、社会教育施設での取組を基に紹介する。

⑩

【県立近代美術館研修】

セカンドスクールの効果的利用
～キンビではこんな活動もできる!!～

横手市立栄小学校 教諭 高橋 満

秋田県立近代美術館では、各校へ配布されるセカンドスクール(SS)プログラムに基づき、各種創作活動や美術鑑賞ができる。また、ねらいに応じてプログラムにない活動も可能で、開催されている特別展と抱き合わせた、独創的な活動を行うこともできる。魅力的なSS利用ができるように、その一部を紹介したい。一方、研修を通して、効果的なSS利用のために、諸施設を利用する際に必要な要素が見えてきた。その要素を紹介したい。



ポスター発表

2月10日(金) 11:15~12:15 体育館

<提案のポイント>

⑪

【広島県教員人事交流】
県外人事交流から見えてきたもの
～広島県教育の現状との比較を通して～

北秋田市立鷹巣南中学校 教諭 清水 裕之

秋田県が推進する「秋田の探究型授業」。広島県が提唱する『広島版「学びの変革」アクションプラン』の推進につながる、広島県山県郡安芸太田町が進めてきた「協調学習」。この両者を、これまでの経験、そして今年度の県外人事交流を通して学んだことを基にして比較した。その結果から、それぞれの良さや特色を積極的に取り入れ、アレンジしながら実践していくことで、児童生徒の「主体的な学び」を更に促すことができると考えた。

⑫

【県立博物館研修】
地域の題材を授業に生かす取組
～小学校第6学年総合的な学習の時間での実践を通して～

男鹿市立船越小学校 教諭 佐々木 淳

本研究では、小学校6年生を対象に、第3学年から各学年の総合的な学習の時間で取り組んできた郷土学習のまとめとしての活動をさせた。具体的には、グループ活動として男鹿市をPRする新聞作りを行わせた。これまでの学習を振り返りながら新聞作りをすることで、児童は自分たちが住む地域に誇りと愛着をもった。また、協働して新聞作りをすること、作成した新聞を発表し合うことで、互いの考えのよさに気づき、視野を広めることができた。

⑬

【県立農業科学館研修】
秋田県の農業分野における先人に関する資料の電子教材化
～社会科学習との関連を中心に～

横手市立大雄小学校 教諭 村上 宙思

小学校の社会科学習を想定し、調べ学習に活用できる補助教材作成に取り組んだ。県立農業科学館の収蔵資料・図書を中心に、秋田県における農業先覚に関する資料を電子データ化した。その人物像や時代背景、事業の経緯等を簡便な形式で概観できることを目指している。また児童の主体的な調べ学習に対応することも視野に入れ、オフラインではあるがホームページの形式をとることで操作性の高い資料整理・情報提示の方法を提案する。

⑭

特別支援学校高等部における自己肯定感を高めるための作業学習の実践
～秋田大学を活用した「わかはとショップ」の開店～

秋田大学教育文化学部附属特別支援学校
教諭 本多 勝成

今年度から、秋田大学で作業製品販売や喫茶活動などを行う活動「わかはとショップ」を定期的に開店している。生徒会を中心としたプロジェクトチームで「地域に喜ばれる活動」について考え、ポスターを作成し、各作業班では質の高いサービスや良質の製品販売を目指して準備に取りかかってきた。生徒の頑張りは大勢のお客の笑顔やアンケートの高評価につながり、地域の方々に喜ばれるという実感が、次の活動への意欲に結び付いている。

⑮

生徒個々に応じた洗濯のスキルの向上を目指した指導の取組
～洗濯指導の実践を通して～（2年次）

県立栗田支援学校 寄宿舎指導員 櫻田 教子

本校寄宿舎では、生活技術の一つとして洗濯のスキルの向上に力を入れた取組を行って2年目である。グループ別の学習会で、必要な知識を習得できるように工夫した。洗濯物を洗う、干す、取り込む、畳む等の工程ごとにポイントを示したテキストを作成し、ふだんの洗濯に活用している。また、退舎生に追跡アンケート調査を行い、集計した。この内容を含め2年間の実践・検証をまとめた。将来の生活技術への応用を意識した実践とその成果を紹介する。



ポスター発表

2月10日(金) 11:15~12:15 体育館

<提案のポイント>

⑬

【県立岩城少年自然の家研修】
自然の家における体験活動が、児童に与える
教育的効果についての考察

由利本荘市立尾崎小学校 教諭 伊東真理子

岩城少年自然の家を利用した複数校の小学5年生を対象に、体験活動が子どもたちに及ぼす影響についてI K R（生きる力）調査を実施した。その結果をもとに各校の活動計画の見直しを行い、より有効と考えられるアクティビティーの入替えなどを含めた再編を試みた。少年自然の家を活用した体験学習がより教育的効果を上げるような教育プログラムについて提案する。

⑭

【秋田大学大学院研修】
居住地校交流の現状と課題に関する研究
～特別支援学校及び小・中学校の教員の意識
調査と事例分析を通して～

県立支援学校天王みどり学園 教諭 加藤しお子

秋田県の特別支援学校における居住地校交流の実態とそれに携わる教員の意識を調査した。交流相手校との連携状況は各事例によって差異があり、計画的・組織的な取組が求められた。また、今後居住地校交流を推進していくためには、特別支援学校と小・中学校の学級担任が考える「地域生活の基盤づくり」「障害理解教育の一環」という意義と「相手校との連携」「活動内容の設定」という課題をすり合わせながら、工夫・改善していくことが求められた。

⑮

**【武田科学振興財団
2016年度高等学校理科教育振興奨励研究】**
県内の植生とバイオームを素材にした教材づくり

県立横手清陵学院高等学校 教諭 松田 義徳

「生物基礎」は多くの生徒が履修する科目で、「植生の多様性と分布」や「生態系とその保全」も学習する。また「バイオーム」という新しい概念が使われている。この分野は、既存の映像等で学習することが多く、その内容も日本の中部・関東地方が中心であり、秋田県の植生やバイオームに関連した資料はほとんどない。本研究は、生徒の生活基盤である秋田県内の代表的な植物や植生を映像化し、授業での活用の一例を提案するものである。

⑯

【株式会社わらび座研修】
民間企業におけるコミュニケーション力と顧客への関わり方

仙北市立角館小学校 教諭 小田島 崇

「株式会社わらび座」は、劇場やホテル経営、ビール製造など多角的に事業を展開する民間企業である。企業の存続には収益を上げることが不可欠であり、社員個々の業務遂行の成果が経営に直結する。顧客を獲得し収益増加につなげるためにどのような点を大事にしているのか、業務を体験しながら研修してきた。また、民間企業での研修を通じて教師にとって大切なことを再認識できた。教職員の資質向上という視点からも民間企業研修の意義を考察し、わらび座での1年をまとめた。